[head](koten.htm)（岩倉紙芝居館古典館[http://hjueda.on.coocan.jp//koten/koten.htm](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/koten.htm)　　　　　宰主　上田啓之）

論語集註　後藤点　　　凡て二十四章  
○　子の曰はく、政をするに德を以てすれば、譬はば、北辰の其の所に居て、衆星之に共（むか）ふが如し。共、音拱、亦作拱。○政之爲言正也。所以正人之不正也。德之爲言得也。行道而有得於心。北辰、北極、天之樞也。居其所、不動也。共、向也。言衆星四面旋繞而歸向之也。爲政以德、則無爲而天下歸之。其象如此。程子曰、爲政以德、然後無爲。范氏曰、爲政以德、則不動而化、不言而信、無爲而成。所守者至簡、而能御煩、所處者至靜、而能制動、所務者至寡、而能服衆。共gòngは音拱、亦拱に作る。○政の言爲るは正。人の正しからざるを正す所以なり。德の言爲るは得なり。道を行ひて心に得ること有り。北辰は北極、天の樞なり。其の所に居るは動かざるなり。共は向。言ふは、衆星の四面に旋繞して之に歸向するなり。政を爲すに德を以てせば、則ち無為にして天下之に歸す。其の象此の如し。程子の曰く、政をするに德を以てして、然して後にすること無し。范氏の曰く、政をするに德を以てすれば、則ち動かずして化し、言はずして信なり。為すこと無くして成る。守る所の者至簡にして、能く煩を御し、處る所の者至靜にして、能く動を制し、務むる所の者至寡にして、能く衆を服す。  
■政之爲言正也とは政の字は人の不正を正すことからくる。攵は“むちうつ”こと、政は鞭で叩いて正す。德之爲言得也とは徳の字は得からくる。道を行ってその心に生まれるものを会得すること。■樞はとぼそ、回転の軸、かなめ。天は北辰（北極星）が軸となり回転している。北辰がすべてを正し秩序付けている。人の世の北辰は不正を正し、道を行い徳を得た人。地球の自転によって起こる天の象と知れば、考へ方は違っていた。■共、向とある。共は恭の初文、向かう義とするが、恭順する義でもある。■旋繞はまわり、めぐること。  
  
○　子の曰はく、詩三百、一言以て之を蔽ふ。曰く、思ひ邪（よこしま）無し。詩三百十一篇。言三百者、擧大數也。蔽、猶蓋也。思無邪、魯頌駉篇之辭。凡詩之言、善者可以感發人之善心、惡者可以懲創人之逸志。其用歸於使人得其情性之正而已。然其言微婉、且或各因一事而發。求其直指全體、則未有若此之明且盡者。故夫子言、詩三百篇、而惟此一言、足以盡蓋其義。其示人之意、亦深切矣。○程子曰、思無邪者、誠也。范氏曰、學者必務知要。知要則能守約。守約則足以盡博矣。經禮三百、曲禮三千、亦可以一言以蔽之。曰、毋不敬。詩は三百十一篇。三百と言ふは、大數を擧ぐ。蔽は猶蓋のごとし。思ひ邪無しは、魯頌（ろしょう）の駉（けい）篇の辭。凡そ詩の言は、善きは人の善心を感發す可し。惡きは以て人の逸志を懲創（こらす）す可し。其の用は人をして其の情性の正を得さしむるに歸すのみ。然れども其の言微婉、且つ或は各々一事に因りて發す。其の直指全體を求むれば、則ち未だ此の若き明にして且つ盡せる者有らず。故に夫子言ふ、詩三百篇にして、惟此の一言、以て其の義を盡くし蓋ふに足れり。其の人に示すの意亦深切なり。○程子の曰く、思い邪無きは誠なり。范氏曰く、學者は必ず要に知るを務む。要を知れば則ち能く約を守。約を守れば則ち以て博を盡くすに足る。經禮三百、曲禮三千、亦一言以て以て之を蔽ふ可し。曰く、敬せざる毋かれ。  
■詩経、魯頌、駉篇の「思無邪　思馬斯徂：これ、ひたすらに、この馬これ徂（ゆ）く」、思は“これ”、sī 斯のこと。これからすれば、これ邪なしと読むべきかもしれない。邪とはここでは心を偽ること。善は善、悪は悪を素直にあらわしている。それが、詩三百に一貫、ひたすらに、人の本性があらわれている。■感發は感応して（善心）を發（おこ）す。■情性は人情と性質であるが、こころ、本性の義。■微婉、かすかでむきだしでなく遠回し。  
読書会：[2011年11月5日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai8.html#2011年11月5日)

○　子の曰はく、之を道（みちび）くに政を以てし、之を齊（ととの）ふるに刑を以てすれば、民免れて恥ずること無し。道、音導。下同。○道、猶引導。謂先之也。政、謂法制禁令也。齊、所以一之也。道之而不從者、有刑以一之也。免而無恥、謂苟免刑罰而無所羞愧。蓋雖不敢爲惡、而爲惡之心、未嘗亡也。道dǎoは音導。下も同じ。○道は猶引導のごとし。之に先だつを謂ふなり。政は、法制禁令を謂ふなり。齊は、之を一にする所以なり。之を道きて從はざる者は、刑有りて以て之を一にするなり。免れて恥ずること無しは、苟（いやしく）も刑罰を免るを羞ぢ愧る所無きを謂ふ。蓋し敢へて惡を爲さずと雖も、而して惡を爲すの心、未だ嘗て亡びざる。  
　之を道くに德を以てし、之を齊ふるに禮を以てすれば、恥の有りて且つ格（いた）る。禮、謂制度品節也。格、至也。言躳行以率之、則民固有所觀感而興起矣。而其淺深厚薄之不一者、又有禮以一之、則民恥於不善、而又有以至於善也。一說、格、正也。書曰、格其非心。○愚謂、政者、爲治之具、刑者、輔治之法。德禮則所以出治之本、而德又禮之本也。此其相爲終始、雖不可以偏廢、然政刑能使民遠罪而已。德禮之效、則有以使民日遷善而不自知。故治民者、不可徒恃其末、又當深探其本也。禮は、制度品節を謂ふなり。格は至なり。言ふは、躳行して以て之を率れば、則ち民固に觀感する所有りて興起する。而れども其の淺深厚薄の一ならざる者は、又禮以て之を一にすること有れば、則ち民不善に恥じて、又以て善に至ること有るなり。一說に、格は正なり。書に曰く、其の非心を格すと。○愚謂ふに、政は治を爲すの具、刑は治を輔くるの法。德禮は則ち治を出す所以の本にして、德は又禮の本となり。此れ其れ終始を相ひ爲し、以て偏く廢す可からざると雖も、然れども政刑は能く民をして罪に遠ざけしむるのみ。德禮の效は、則ち以て民をして日に善に遷りて自ら知らざしむ有り。故に民を治むる者は、徒（ただ）に其の末を恃む可からず。又當に其の本に深く探るなり。  
■菅仲や子産は、土地制度を改め、耕作を振興し、教育に力を入れ、商業を活性化するに、法令罰則を運用し従事せぬものや税を支払わぬものに厳しくあたり、税収を図り、疲弊していた国を立て直した。「倉廩満ちて礼節を知り、衣食足りて栄辱を知る。」は菅仲の言葉。鄭の子産、疾（病）あり。子大叔に謂いて曰く、「我死なば子必ず政を為さん。唯だ有徳者のみ、能く寛を以て民を服す。其の次は猛にしくは無し。それ火は烈なり。民望みて之を畏る。故にこれに死する者鮮し。水は惰弱なり。民狎れて之を玩ぶ。則ちこれに死する者多し。故に寛は難し（『春秋左氏伝』、昭公二十年）」孔子はこれに満足せず、理想の政治を目指した。■朱熹は法制禁令で導き、従はぬ者を刑罰をもって一つにするとした、一にするの意味がはっきりしない。それで、政は治める道具、刑罰は治めることを補助する法とした。政とは攵（むち）を以て正すことが原義、齊は髪飾り（正装）した婦人達が祭祀に奉仕するさま、厳かで敬（つつしみ）があり、規範が整っているさま、つまり秩序よく治まっていること。威厳と鞭で導き、刑罰により正し治めること。■朱熹は徳を禮の本とし、禮を制度品節とし、徳と禮は相終始し、非心を格（ただ）すとした。之を民とし、徳治政治とした。■政を以て導き、刑を以て齊す、これとて実現は難しい。「貧して諂ふこと無く、富みて驕ること無し」と子貢がしたことに、孔子は「貧しくして樂しみ、富みて禮を好む者に若かず」とした。上には上がある、徳を以て導き、禮を以て節制するに若かず。これは大変難しい。孟子は堯舜や湯、文王の王道として諸侯にこれを説く。孔子は、王、諸侯のみならず、君子はかくあるべきとした。士が、己の徳と禮の至らぬを恥じ、日々精進、切磋琢磨する、貧富、貴賎の身分にかかわらず、己を導く指針とした。  
読書会：[2011年11月19日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai8.html#2011年11月19日)

○　子の曰はく、吾十有五にして學に志す。　古者十五而入大學。心之所之謂之志。此所謂學、卽大學之道也。志乎此、則念念在此、而爲之不厭矣。古へは十五にして大學に入る。心の之く所、之れを志と謂ふ。此の謂ふ所の學は、卽ち大學の道なり。此に志せば、則ち念念（常に心に思い続ける）此に在りて、之を爲して厭（いと）はず。  
■朱熹は學に志すを大學の道に志すとする。孔子が十五にして大學に入ることができたのか？貴族の子弟や士の身分であれば可能である。十五歳の孔子はまだ顔氏のところに居たのか、それとも孔家に入り込んでいたのか？司馬遷によれば、十七歳の時に孟厘子が、「孔丘、年少にして禮を好む、其れ達する者か」と言ったとしており、ならば、大學教育を受けていたことになろうが。一方、「吾少（わかく）して賎（いや）し。故に鄙事（ひじ）に多能なり（子罕篇）。」「何の常師（じょうし）かこれ有らん」ともあり、これからすれば、大学教育を受けるどころではなかったはずである。  
　三十にして立つ。　有以自立、則守之固、而無所事志矣。以て自立すること有れば、則ち之を守ること固くして、志を事（こと；為す、治める、勉める）とする所無し。  
■朱熹の解釈では、大學を出、學を以て自立したことになろう。もはや學を守ること堅固であり、學を志す段階は終へたといふことか。孔子三十歳の時、魯の昭公の二十年（BC522年）、司馬遷によれば、齊の景公と晏嬰が魯を訪れ、景公が孔子に下問したとする。齊の國君からの直接の下問であり、學を以て自立といふ根拠となる。  
　四十にして惑はず。　於事物之所當然、皆無所疑、則知之明、而無所事守矣。事物の當に然る所に於て、皆疑ふ所無ければ、則ち之を知ること明らかにして、守を事とする所無し。  
■朱熹は、事物があたりまえであるところに疑いが無くなることを知ることとし、そうなれば、もはや惑ひはなく、學を守るといふ段階は終へた、とするのであろう。孔子は、三十五歳の時、昭公は齊に亡命し、孔子も齊に適き、高昭子の家臣となり、齊の景公への仕官を試みていた。韶の音楽を聴き、三月肉の味を知らなかった、といふ。不惑といふことを感じさせるものはない。  
　五十にして天命を知る。　天命、卽天道之流行而賦於物者。乃事物所以當然之故也。知此、則知極其精、而不惑、又不足言矣。天命は、卽ち天道の流行にして物に賦（ふ）する者。乃ち事物の當に然る所以の故なり。此を知れば、則ち知ること其の精を極めて、而して惑はざること、又言ふに足らず。  
■朱熹は、事物があたりまえであるのは、天がそのように物に授けた、天賦のもの、それに思ひ至れといふことで、天の命が人に下るようなイメージではない。魯の定公が、孔子を中都の宰から司空（土木長官）とし、更に大司寇（法務大臣）としたのが孔子五十歳の頃とみられる。孔子が天命らしきことを口にするのは、五十六歳で魯を出、衛から陳に適く際、匡で五日拘束された際に、「文王、既に沒す。文、ここ（孔子）に在らざるか。」と述べた時であろう。六十歳くらいであり、実際の年齢とは一致しては居ない。  
　六十にして耳順ふ。　聲入心通、無所違逆。知之之至、不思而得也。聲入り心通じ、違ひ逆ふ所無し。之を知るの至り、思はずして得る。  
■朱熹は、他人の言葉がそのまま心に通じ、それは違うとかそうじゃないと逆らうことがないとする。これはそうしようと思って得られる境地ではなく、おのずとそうなる、とする。  
 　七十にして心の欲する所に從ひて矩（のり）を踰（こ）へず。從、如字。○從、隨也。矩、法度之器、所以爲方者也。隨其心之所欲、而自不過於法度、安而行之、不勉而中也。○程子曰、孔子生而知者也。言亦由學而至、所以勉進後人也。立、能自立於斯道也。不惑、則無所疑矣。知天命、窮理盡性也。耳順、所聞皆通也。從心所欲不踰矩、則不勉而中矣。又曰、孔子自言其進德之序如此者、聖人未必然、但爲學者立法、使之盈科而後進、成章而後達耳。胡氏曰、聖人之敎亦多術。然其要使人不失其本心而已。欲得此心者、惟志乎聖人所示之學、循其序而進焉、至於一疵不存、萬理明盡之後、則其日用之閒、本心瑩然、隨所意欲、莫非至理。蓋心卽體、欲卽用。體卽道、用卽義。聲爲律、而身爲度矣。又曰、聖人言此、一以示學者當優游涵泳、不可躐等而進、二以示學者當日就月將、不可半塗而廢也。愚謂、聖人生知安行、固無積累之漸。然其心未嘗自謂已至此也。是其日用之閒、必有獨覺其進、而人不及知者。故因其近似以自名、欲學者以是爲則而自勉。非心實自聖、而姑爲是退託也。後凡言謙辭之屬、意皆放此。從は、字の如し。○從は隨なり。矩は法度の器、方を爲す所以の者。其の心の欲する所に隨ひて、自らを法度に過ぎず、安んじて之を行ひ、勉めずして中るなり。○程子の曰く、孔子は生まれながらにして知れる者なり。亦學に由りて至ると言ふは、後人に勉め進むる所以なり。立つは、能く自ら斯の道に立つなり。惑はざるは、則ち疑ふ所無し。天命を知るは、理を窮めて性を盡くすなり。耳順ふは、聞く所皆通ずるなり。心の欲する所に從ひて矩を踰へざるは、則ち勉めずして中る。又曰く、孔子自ら其の德に進むの序を言うこと此の如きは、聖人未だ必ずしも然らず、但學者の爲に法を立て、之をして科（あな）に盈ちて而して後進み、章を成して而して後達せしむるのみ。胡氏（胡安国、1074年 - 1138年）の曰く、聖人の敎、亦術多し。然れども其の要、人をして其の本心を失はざらしむのみ。此の心を得んと欲する者は、惟聖人の示す所の學に志し、其の序に循ひて進み、一疵存せず、萬理明かに盡すの後に至りて、則ち其の日用の閒、本心瑩然（えいぜん、玉のごとく光る）として、意（こころ）の欲する所に隨ひて、至理に非ざること莫し。蓋し心は卽ち體、欲は卽ち用、體は卽ち道、用は卽ち義。聲は律を爲し、身は度を爲す。又曰く、聖人此を言ふは、一は以て學者當に優游涵泳（ゆうゆうかんえい、のびのび学ぶ）して、等（順序）を躐（こ）え進む可からざるを示し、二に以て學者に當に日に就（な）り月に將（すす）みて、半塗にして廢（す）つ可からざるを示す。愚謂（おもへら）く、聖人生知安行（生まれながら知り安んじて行ふ）、固より積累の漸（だんだん積み重なる）無し。然れども其の心未だ嘗て自ら已に此に至ると謂はざるなり。是れ其の日用の閒、必ず獨り其の進むことを覺りて、而して人の知るに及ばざる者有り。故に其の近く似たるに因りて以て自ら名づく。學者是を以て則として自ら勉めんことを欲す。心實に自ら聖として、姑（しばら）く是れ退託を爲すには非ず。後の凡そ謙の辭と言ふの屬は、意皆此に放（なら）へ。  
■科は窠（か）と同声で穴、孟子、尽心下に、水が流れるとき、「科に盈たざれば行かず」とあり、徳行のありかたに喩える。■北宋の儒者の議論。各年代において、水がその科を充たして次に行くように、徳を充たす順序を孔子が示したもの、聖人と雖も、未だ必ずしも然らず、とする。■朱熹は、聖人は生まれながらのもの、それが自立的に成長するのを覚るが、徐々に成長するものではなく、今ここに至るとは云うものではなく、自分には分かるが、周囲の者には分らない。それで、年代別に人に分る表現としたもの。学ぶ者は、それを目標として勉めよ、とする。■非心實自聖、而姑爲是退託也は、意味がわからない。  
[読書会:2011年12月3日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai8.html#2011年12月3日)

○　○孟懿子孝を問う。子の曰はく、違ふこと無し。孟懿子、魯大夫仲孫氏、名何忌。無違、謂不背於理。孟懿子は魯の大夫の仲孫氏、名は何忌。違ふこと無しは、理に背かざるを謂う。  
■孟懿子は孟釐子の子、父の遺言に従ひ、孔子の弟子となって禮を学んだ。孔子が魯の定公十二年（前498年：孔子55歳頃）三桓氏の武装解除に失敗したのは、孟懿子が公斂處父（こうれんしょほ）の言により成を武装解除しなかったことによる。この対話は孟懿子が禮を孔子に学んでいた頃のものと思はれる。孟懿子は「三年無改於父之道、可謂孝矣」に従ひ父、孟釐子の禮に従ひ、自分は孝行であろうと孔子に問ふた。孔子は無違とした。孟懿子は何を言はれたのか分からなかった。「理に背かざる」は朱熹風で原理で説明する。  
　樊遲御たり。子之に告げて曰はく、孟孫孝を我に問ふ。我對へて曰く、違ふこと無しと。樊遲、子弟子、名須。御、爲孔子御車也。孟孫、卽仲孫也。夫子以懿子未達而不能問、恐其失指、而以從親之令爲孝。故語樊遲以發之。樊遲は孔子の弟子、名は須。御は、孔子の爲に車を御すなり。孟孫は卽ち仲孫なり。夫子、懿子の未だ達せずして問ふこと能はざるを以て、恐く其の指を失ひて、親の令に從ふを以て孝と爲す。故に樊遲に語（つ）げ、以て之を發す。  
■孔子の当時、魯の三桓氏（季孫、孟孫、叔孫各氏）は家臣でありながら魯公の禮を行っていた。僭禮であり、孔子は禮を違へているとした。しかし、孟懿子はそこが分かっていない、と、樊遲を通じてそれを指摘しようとした。  
　樊遲が曰く、何と謂ふことぞ。子の曰く、生けるには之に事つるに禮を以てし、死すれば之を葬るに禮を以てし、之を祭るに禮を以てす。生事葬祭、事親之始終具矣。禮、卽理之節文也。人之事親、自始至終、一於禮而不苟。其尊親也至矣。是時三家僭禮。故夫子以是警之。然語意渾然、又若不專爲三家發者。所以爲聖人之言也。○胡氏曰、人之欲孝其親、心雖無窮、而分則有限。得爲而不爲、與不得爲而爲之、均於不孝。所謂以禮者、爲其所得爲者而已矣。生事葬祭は、親に事つるの始終具はれり。禮は卽ち理の節文なり。人の親に事るは、始めより終わりに至るまで、禮を一にして苟もせずは、其れ親を尊ぶの至なり。是の時三家禮を僭す。故に夫子是を以て之を警む。然れども語意渾然にして、又專ら三家の爲に發せざる者の若し。聖人の言爲る所以なり。○胡氏の曰く、人の其の親に孝をせんと欲すること、心窮まり無しと雖も、而して分は則ち限り有り。為すことを得てせざると、為すことを得ずして之を為すは、不孝に均し。所謂禮を以てするは、其の為すことを得る所の者を為すのみ。  
■樊遲も孔子が何を言はんとしているかが分からない。之とは親、事葬祭は禮を以てせねばならない。違うとは禮に適っていないとした。政権を運営していた三桓氏の禮を間違いと批判したものであり、政治の現実のなかでは、孔子の批判は少数派であり、受け入れられなかったようである。胡氏は家臣には分限があり、為すべきことをしないのも、為してはならぬことをするのも、不孝と解説した。

○　孟武伯孝を問ふ。子の曰はく、父母は唯其の疾を之憂ふ。武伯、懿子之子、名彘。言父母愛子之心、無所不至。唯恐其有疾病、常以爲憂也。人子體此、而以父母之心爲心、則凡所以守其身者、自不容於不謹矣。豈不可以爲孝乎。舊說、人子能使父母不以其陷於不義爲憂、而獨以其疾爲憂、乃可謂孝。亦通。武伯は懿子の子、名は彘（てい）。言ふは、父母、子を愛するの心、至らざる所無し。唯恐らく其れ疾病有ることを。常に以て憂ひとす。人の子此を體して、父母の心を以て心とせば、則ち凡そ其の身を守る所以の者、自ら謹まざるに容れず。豈以て孝とす可からざらん。舊說、人の子の能く父母をして其れ不義に陷る以て憂ひと為させしめず、獨り其の疾を以て憂ひと為す。乃ち孝と謂ふ可しと。亦通ず。  
■旧説は、子は父母に不義に陥り憂えしめてはならず、（子が）病むことをだけを憂へとする。病気以外の事で父母を悩ましてはいけない。朱熹は、父母の子を愛する心は限りなく、子の疾病を常に憂れふ、子はそのことに思ひを致し、自ら謹むことが孝とした。そういう一般論とした。■孔子は、孟懿子には「無違」とされた。武伯は、父の僭禮を憂へたが、孟懿子は病気であったかもしれない。息子には、父母の疾（やまい）を憂へとされたのではないか。  
読書会：[2011年12月10日](http://www.kyoto.zaq.ne.jp/dkanp700/koten/rongodokushokai8.html#2011年12月10日)

○　子游孝を問ふ。子の曰はく、今の孝は、是れ能く養ふことを謂ふ。犬馬に至るまで、皆能く養ふこと有り。敬せずんば何を以てか別かたん。養、去聲。別、彼列反。○子游、孔子弟子、姓言、名偃。養、謂飮食供奉也。犬馬待人而食、亦若養然。言人畜犬馬、皆能有以養之。若能養其親、而敬不至、則與養犬馬者何異。甚言不敬之罪、所以深警之也。○胡氏曰、世俗事親、能養足矣。狎恩恃愛、而不知其漸流於不敬、則非小失也。子游、聖門高弟、未必至此。聖人直恐其愛踰於敬。故以是深警發之也。養yàngは去聲。別biéは彼bǐ列lièの反（声が合はない）。○子游は孔子の弟子。姓は言、名は偃。養は飮食供奉を謂ふ。犬馬は人を待ちて食ふ、亦養ふが若く然り。言ふは、人犬馬を畜ふ、皆能く以て之を養ふこと有り。若し能く其の親を養ひて、敬至らずんば、則ち犬馬を養ふ者と何ぞ異らん。甚だ不敬の罪を言ひて、深く之を警（いましむ）る所以なり。○胡氏の曰く、世俗、親に事つる、能く養ひて足れり。恩に狎れ愛を恃みて、其の漸く不敬に流るを知らざること、則ち小失に非ず。子游、聖門の高弟、未だ必ずしも此に至らず。聖人直に其の愛の敬に踰へんことを恐る。故に是を以て深く警して之を發す。  
■養yàngで目上を養ふ、yǎngで目下を養ふ。字義は、敬無くしては親を養っても犬馬を養ふと変はることが無い。孝を行ふには敬が無くてはならないこと。■子游は呉の人で、武城の宰として孔子が来訪した際に絃歌を演奏しており、牛刀で鶏を割くのかとからかわれ、小人道を学べば使い易しと先生が申されたのではありませんかと、切り返し、偃（子游）の言ふことはその通りだと孔子に言はしめた弟子（陽貨篇）。子游の禮にはいささか大仰でもったいぶったところがあった。やっていることは素晴らしいが敬に欠けると孔子は厳しかった。■また、武城では、子游は澹台滅明を得たのであるが、孔子はあまり彼を評価をしなかったが、後に、その人物を見抜けなかったことを後悔したともある。なかなかの才子であり、次の子夏と比べれば、形式にとらわれない氣性であったが、行き過ぎて放埓となる氣があった。

○　子夏孝を問ふ。子の曰はく、色難し。事（わざ）有れば、弟子其の勞に服し、酒食有れば先生饌す。曾て是を以て孝と爲せんや。食、音嗣。○色難、謂事親之際、惟色爲難也。食、飯也。先生、父兄也。饌、飮食之也。曾、猶嘗也。蓋孝子之有深愛者、必有和氣、有和氣者、必有愉色、有愉色者、必有婉容。故事親之際、惟色爲難耳。服勞奉養、未足爲孝也。舊說、承順父母之色爲難。亦通。○程子曰、告懿子、告衆人者也。告武伯者、以其人多可憂之事。子游能養、而或失於敬。子夏能直義、而或少溫潤之色。各因其材之高下、與其所失而告之。故不同也。食sìは音嗣。○色難しは、親に事るの際、惟色を難しとするを謂ふ。食は飯なり。先生は父兄なり。饌は之を飮食するなり。曾は猶嘗のごとし。蓋し孝子の深愛有るは必ず和氣有り、和氣有るは必ず愉色有り、愉色有るは必ず婉容有り。故に親に事るの際、惟色を難しと爲すのみ。勞に服き養を奉るは、未だ孝とするに足らざる。舊說に、父母の色に承順するを難しとす。亦通ず。○程子の曰く、懿子に告るは、衆人に告る者なり。武伯に告るは、其の人憂ふ可き事多きを以てす。子游能く養ひて、或は敬に失す。子夏は能く義を直して、或は溫潤の色少なし。各々其の材の高下と、其の失する所とに因りて之に告ぐ。故に同じからず。  
■色難の色は顔色、旧説は父母の顔色、色難は父母の顔色を見て、気に入るようにつかえることは難しい。これでも通じるが、朱熹は、自分の顔色を和らげて父母につかえることは難しいとした。程子は孔子が弟子に応じてその足らざるを告げたと解した。■子夏は、形から入る（子張篇12）。仕事が有れば弟子にその労をさせ、酒や食（sìは飯）は目上に供へて先とした。心がこもっていない形だけで、どうして孝と言へようか。朱熹は先生を父兄とする。■曾を朱熹は猶嘗とし、後藤点は、かつてcéng、と読ましているが、通常はzēngすなはち、とする。

○　子の曰はく、吾と囘と言ふこと終日す、違はざること愚なるが如し。退いて其の私を省れば、亦以て發するに足れり。囘は愚ならず。囘、孔子弟子、姓顏、字子淵。不違者、意不相背、有聽受而無問難也。私、謂燕居獨處、非進見請問之時。發、謂發明所言之理。愚聞之師。曰、顏子深潛純粹、其於聖人、體段已具。其聞夫子之言、默識心融、觸處洞然、自有條理。故終日言、伹見其不違如愚人而已。及退省其私、則見其日用動靜語默之閒、皆足以發明夫子之道、坦然由之而無疑。然後知其不愚也。囘は孔子の弟子、姓は顏、字は子淵。違はずは、意相背かず、聽受有りて問難すること無きなり。私は燕居獨處を謂ひ、進見請問の時に非ず。發は言ふ所の理を發明するを謂ふ。愚之を師に聞く。曰く、顏子深潛純粹、其の聖人に於て、體段已に具はる。其の夫子の言を聞くや、默識し心融、觸る處洞然にして、自ら條理有り。故に終日言ふ。伹其の違はざる愚人の如くなるを見るのみ。退きて其の私を省るに及びて、則ち其の日用動靜語默の閒を見るに、皆以て夫子の道を發明するに足れり。坦然として之に由りて疑ひ無し。然る後に其の愚ならざるを知る。  
■問難は問い尋ねる、問い正してなじること。■私とは、燕居（自宅でくつろぐこと）、獨處（一人で居ること）で、進見請問は、進みて見（まみ）へ請ふて問ふ。■発明は開いて明らかにする。■體段は本体と段階。■默識（もくし）は無言で他人の真意を知ること。■孔子と顔囘の対話は、孔子の言葉に聴き入る顔囘が頷くばかりで、首を振るだけの愚かな弟子としか見えない。先進篇に、「囘や、我を助くる者に非ざるなり。吾が言に於て、説ばざるところ無し。」子貢の当意即妙な相の手のなくば、子路のごとき直言もなく、何を言ってもよろこんで聴き入る。しかし、帰って一人それを考え抜いているようで、その行為をみれば意味を理解していることが分かる。顔囘は愚かではない。他の弟子はこうして孔子の意図するところを顔囘をみて理解することが出来た。  
読書会：[2012年2月11日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai8.html#2012年2月11日)  
  
○　子の曰はく、其の以（す）る所を視、以、爲也。爲善者爲君子、爲惡者爲小人。以は爲なり。善をする者は君子、惡をする者は小人なり。  
■朱熹は君子に喩へて解説している。善をするのが君子、悪をするのが小人。  
　其の由る所を觀　觀、比視爲詳矣。由、從也。事雖爲善、而意之所從來者、有未善焉、則亦不得爲君子矣。或曰、由、行也。謂所以行其所爲者也。　觀は視に比するに詳なり。由は從なり。事善をすると雖も、意の從りて來る所の者、未だ善ならざること有れば、則ち亦君子爲ることを得ず。或ひと曰く、由は行なり。其のする所を行ふ所以の者を謂ふ。  
■觀は視より詳しく、それを從（おこ）す意を觀る。善を行っていても、その意のよってくる所が善でなくば、君子とは言へない。  
　其の安んずる所を察すれば　察、則又加詳矣。安、所樂也。所由雖善、而心之所樂者、不在於是、則亦僞耳。豈能久而不變哉。察は則ち又詳するを加ふ。安は樂しむ所。由る所善と雖も、而れども心の樂しむ所の者、是に在らずば、則ち亦僞のみ。豈能く久しくして變ぜんや。  
■察は觀より更に詳しく、意は善であっても楽しんで行ふかをみる。楽しめないのは、偽君子である。  
　人焉んぞ廋（かく）さんや。人焉んぞ廋さんや。焉、於虔反。廋、所留反。○焉、何也。廋、匿也。重言以深明之。○程子曰、在己者能知言窮理、則能以此察人倫如聖人也。焉yānは於yú虔qiánの反(声が合はない)。廋sōuは所suǒ留liúの反（音も声も合はない）。○焉は何なり。廋は匿なり。重ね言ひて以て深く之を明せり。○程子の曰く、己に在る者能く言を知り理を窮めれば、則ち能く此を以て人倫を察すること聖人の如し。  
■二度繰り返し、深く之を明らかにした。楽しんでなさずば君子にあらず、地がでます、匿（かく）すことはできない。朱熹はこのように解釈した。■古注では、以を用、其所行用（行ひ用ふ所）、由を經、其所經從（へてしたがふ所）、安では其所安處（やすんじておる所）としており、君子の基準とみたものではなく、人を見抜くこととした。■以は用ふ、為す、執ること。ここでは、学ぶところ、仕へるところを視る。由は出所を示す、事の原因を示す。何を拠り所としているかを觀る。安は落ち着かせる、しずまる、楽しむ、満足する、つまり本心のこと。本心を察せよ。これは他人ばかりでなく、自身においてもそうである。人は本心を偽るものである。本心を見失ふこともある。廋は室（心）に入って捜し求めることが原義で、かくす、さがすの両義がある。どうして本心を隠せようか、何故、隠そうとするのか。

○ 子の曰はく、故きを溫（たず）ねて新しきを知るは、以て師と爲る可し。溫、尋繹也。故者、舊所聞。新者、今所得。言學能時習舊聞、而每有新得、則所學在我、而其應不窮。故可以爲人師。若夫記問之學、則無得於心、而所知有限。故學記譏其不足以爲人師。正與此意互相發也。溫は尋繹（じんえき）なり。故は舊と聞く所。新は今得る所。言ふは、學びて能く時に舊聞を習ふ、每（つね）に新しき得ること有れば、則ち學ぶ所我に在りて、其の應窮まらず。故に以て人の師爲る可し。夫れ記問の學の若きは、則ち心に得ること無くして、知る所限り有り。故に學記に、其の以て人の師爲るに足らずと譏るは、正に此の意と互いに相發す。  
■尋繹（じんえき）は、事の道理を研究すること。■故（もと、もとからの意）は、旧聞のこと、新は今得たこと。故は旧で新の反、古は今の反。■應、応対すること窮まりない、としている。應は、まさに～すべし、当然～するはず。■旧聞を習ふたびに新しきことを得る、学ぶ主体が我にあり、窮するところがない。人の師となるに足りる、としている。■禮記の學記に、「記問の學、以て人の師為るに足らず。必ずや其れ語を聽くか、力問ふこと能はず、然る後に之を語る、之を語りて知らず。」とある。問ふ力なく、聞いたことを語るのみ、自分で咀嚼ができず聞いたことを語るのみ。■詩、秦風、小戎（しょうじゅう）に「言（わ）れ君子を念（おも）ふに、温（おん）として其れ玉の如し」とあり、温故とは、故を玉のごとく念ふ。■孔子には常師がなかったとある。では、あなたの師とは何かと問はれて、温故して知新することを師とした、と言はんばかり。何故古gūでなく故gùとしたのか。gùには固（もとより）や顧（かえりみる）がある。故は原因、事故、以前から多年にわたるの義があり、単に古いことでなく、物事が、多年にわたり色々な原因で変遷をしたさまや事件などがあり、そういうものを経て今がどうあるかを学ぶことになろう。  
読書会:[2012年2月18日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai8.html#2012年2月18日)

○ 子の曰はく、君子は器ならず。器者、各適其用、而不能相通。成德之士、體無不具。故用無不周、非特爲一材一藝而已。器は、各（おのおの）其の用に適（かな）ひ、相通ずること能はず。成德の士は、體具ふざること無し。故に用周（あま）ねからざる無し。特（ただ）に一材一藝を爲すのみに非ず。  
■酒器、茶器、食器、祭器、器は用に適ふ。酒器であって茶器といふことはない。君子を成德の士とし、體用論により、その本質を供へ、その作用、何にも対応が可能。これしかできないといふことはない、と朱熹はする。■義疏は、「器は用を給（あた）ふ物なり。猶、舟が海に汎（あまね）き山を登らざるべく、車が陸行すべく、海を濟（わた）るべからざるが如し。君子、當（まさ）に才業は周普（すみずみまでゆきとどく）し、器が一を守る如しを得ず」とする。同じ思考にある。■孔子は君子を不器とし、子貢を器、瑚璉（これん：祭祀に用いる貴重な器)とした。何が言いたいのか。易に、「見（あら）はるる、乃ちこれを象といひ、形ある、乃ちこれを器といひ、制して用ふる、これを法といふ（繋辞上）」とある。人として形が出来上がっている。器とは、器を用いる主体を必要とする。最高の器であるが、子貢よ、器でなく、自分自身を生きよ、と言いたかったのだろうか。

○ 　子貢、君子を問ふ。子の曰はく、先ず其の言（こと）を行ふて、而して後に之に從ふ。周氏曰、先行其言者、行之於未言之前。而後從之者、言之於旣行之後。○范氏曰、子貢之患、非言之難、而行之難。故告之以此。周氏の曰く、先ず其の言を行ふは、之を未だ言はざる前に行ふ。而して後に之に從ふは、之を旣に行ふ後に言ふ。○范氏の曰く、子貢の患は、言の難きに非ずして、之を行ふこと難し。故に之に告ぐるに此を以てす。  
■朱熹は、周氏と范氏を引用するのみ。古注は、孔安国を引き、「小人は多言を疾ひ、而して之を行ひて周せず」と次の条につなげている。■君子は不器という前句の次に配されており、そこがなんともおかしい。孔子は子貢に君子を問われて、不器とは言わなかった。不器とはなんぞやと頭を悩ますところに、そう難しく頭をひねるな。まずはそのことが出来ねば、言ってみてもどうしようもあるまい。自らその境地に達すれば、意味もおのずと分かる。

○ 　子の曰はく、君子は周して比せず、小人は比して周せず。比、必二反。○周、普偏也。比、偏黨也。皆與人親厚之意。伹周公而比私耳。○君子小人所爲不同、如陰陽晝夜毎毎相反。然究其所以分、則在公私之際、毫釐之差耳。故聖人於周比･和同･驕泰之屬、常對擧而互言之、欲學者察乎兩閒、而審其取舍之幾也。比bìは必二の反。○周は普偏なり。比は偏黨なり。皆人と親厚するの意。伹し周は公にして比は私しのみ。○君子小人に爲す所同じからず、陰陽晝夜の毎毎相反するが如し。然れども其の分るる所以を究むれば、則ち公私の際、毫釐の差に在るのみ。故に聖人の周比･和同･驕泰の屬（たぐひ）に於て、常に對し擧げて互に之を言ふ。學者、兩閒を察して其の取舍の幾（わずかなきざし）を審らかにせんと欲すなり。  
■君子は和して同ぜず、小人は同じて和せず（子路篇）、ともある。朱熹は、周比、公私、和同、驕泰、君子と小人の差はわずかなところにあるが、取り違えると大変な差となる、同じ偏でも周は普偏→公、比は偏党→私、とした。周は、説文に、「密なり」とあり、周密な美しさ、行き届く、あまねし、めぐらす、公平なこと。■比bìは二人が相並ぶ形。bǐでは比べること。説文には、「密（した）しむなり」、二人相親しむ、一部のものに私（ひそ）かに親しむとする。二人は、往々にして、これを比べ、一方が他方を従へる関係と為り易い。権力者や金持ちにはへつらい、己がそうであれば相手を見下すことになる。「貧しくして諂ふことなく富みて驕ることなし」は子貢の心境であった。貧しくとも楽しみ、富みても礼を好むに如かず、と孔子は言ふ。有教無類（衛霊公篇）。類とは身分や出身による貴賎、庶鄙のこと。教育によりこれを相対化できるとされた。彼は彼、我は我、それぞれの人生がある、孔子は君子という概念を変容させ、己の人生を生きぬく人を君子とし、人としてはかくありたいと望まれたのであろう。  
読書会：[2012年3月3日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai9.html#2012年3月3日)

○　子の曰はく、學びて思はざれば、則ち罔（くら）し。思ひて學びざれば則ち殆（あやう）し。不求諸心、故昏而無得。不習其事、故危而不安。○程子曰、博學･審問･愼思･明辨･篤行。五者廢其一非學也。諸を心に求めず、故に昏くして得ること無し。其の事を習はず、故に危くして安からず。○程子の曰く、博學･審問･愼思･明辨･篤行。五つの者、其の一を廢つれば學に非ず。  
■sīには思、斯、私、司がある。思は囟（頭）と心、頭と心を使う、慕う。斯は其と斤（斧）、斤で切り離す。私は、禾とム（耜）耕作する人、詩、小雅、大田に、「我が公の田に雨ふり、遂に我が私に及べ」とあり、の私は私有地、またその耕作権を持つ隷農。司はㅂとㅓからなり、ㅂをㅓでひらけて治める、神の言葉で政を行ふこと。sīには、学んだことを、頭と心を用ゐ、慕ひ、切り分けて、我が血肉とし、己や政を治める、といったイメージ。思を選んだのは、頭と心をバランスよく用ゐることに重点を置いた。  
■wǎngには罔、網、枉、往がある。罔は网と亡からなり、网は網のことで獣用の網を罔、漁用の網を罟とするが、詩、小雅、戮我に、「皇天、極まり罔（な）し」とあるごとく無を意味する。網はすでにみた。枉は、木と王であるが元来は㞷で、㞷は王と之（止：あし）からなり、木が止まっており、真直ぐでないこと、往は彳と主（元来は㞷）であり、彳止と王からなり、王が之（ゆ）くこと、過ぎ去った月日でもある。wǎngには、無い、網にかかる、真直ぐでない、過去のもの、といったイメージになる。罔を昏と訓じているが、自らのものでない、無いが原義。学んだことに埋没して、真直ぐに自分が出せず、今に生かせないこととなろう。  
■dàiには、殆、怠、代等がある。殆は歺（残骨）と台からなり、歹dǎi人は悪人のこと、台は、土を盛り上げ霊を降ろす高台の象形が原義であるが、この場合の台は、怠の意がある。怠は台と心からなり、台はよろこぶことであるが、怠慢のよろこびであり、なまけることでもある。殆に怠の義があるが、歺に死のイメージがあり、（死に）近い、ほとんど、危うい義となる。代はイと弋であるが弋は元来尗（戚「まさかり」の初文）で、中世に王が剣をかざして爵位を授けるごとく、尗を受けて王となるは、天から王を授かる、帝の代はり、その延伸から、一方で他方のかわり、まにあはせることとなったのであろう。dàiには殆をあて、危ういと訓じている。dàiには、よろこびがあるが、なまけており、まにあわせで、思い込みに近いものをぬかよろこびするイメージとなる。

○ 　子の曰はく、異端を攻（おさ）むるは、斯れ害なるのみ。范氏曰、攻、專治也。故治木石金玉之工曰攻。異端、非聖人之道而別爲一端。如楊･墨是也。其率天下至於無父無君。專治欲精之、爲害甚矣。○程子曰、佛氏之言、比之楊･墨、尤爲近理。所以其害爲尤甚。學者當如淫聲美色以遠之。不爾、則駸駸然入於其中矣。范氏の曰く、攻は專ら治むなり。故に木石金玉を治む工を攻と曰ふ。異端は、聖人の道に非ずして別に一端を爲す。楊･墨が如き是れなり。其の天下を率いて父無く君無きに至らしむ。專ら治めて之に精せんと欲せば、害を爲すこと甚だし。○程子の曰く、佛氏の言、之を楊･墨に比すれば、尤も理に近きと爲す。所以（だから）、其の害尤も甚だしきと爲す。學者、當に淫聲美色の如く以て之を遠ざくべし。爾らずんば、則ち駸駸然として其の中に入る。  
■攻、周礼、考工記に、攻木、攻皮、攻金などの職が有り、それぞれの材質に加工するものをいう。薬草で害虫を防ぐことを「薬草を以てこれを攻む」といい、すべてことを治める意に用いる。ものを学び究めることを攻学、攻究という（字統）。異端を究めようとすれば、害があるのみ。范氏は異端を聖人（孔子）の道でなく、別の一端、楊子（前370頃? - 前319頃?）、墨子（前.450頃?～前390頃？）の如き学とした。孔子の時には成立しない。伊藤仁斎は、根本を学ばず、バラバラの異端を学ぶのは害とみた。  
常師なく、あらゆることから学んだ孔子が、異端を学ぶことを禁じたとは思へない。少（わか）い弟子が、熱中して学んでいたものが、まず学ぶべきものと異なり端となるものであった。熱中するのはよいが、まだ根本が立たずして、攻乎と強調された、攻しているのが異端。まず攻乎すべきは詩と禮である！これを棚上げしては、斯害、也已と強く念押しされた。  
読書会：[2012年3月10日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai9.html#2012年3月10日)

○ 　子の曰はく、由、女（なんじ）に之を知ることを誨（をし）へんか。之を知るを之を知るとし、知らざるを知らずとす、是れ知れるなり。女、音汝。○由、孔子弟子、姓仲、字子路。子路好勇。蓋有強其所不知以爲知者。故夫子告之曰、我敎女以知之之道乎。但所知者、則以爲知、所不知者、則以爲不知。如此則雖或不能盡知、而無自欺之蔽、亦不害其爲知矣。況由此而求之、又有可知之理乎。女rǔの音は汝。○由は孔子の弟子、姓は仲、字は子路。子路勇を好む。蓋し其の知らざる所を強いて以て知るとなす者有り。故に夫子之に告げて曰く、我女に敎ふるに之を知るの道を以てせんか。但知る所の者は、則ち以て知るとし、知らざる所の者は、則ち以て知らずとす。此の如くんば、則ち或は盡く知ること能はずと雖も、而して自ら欺くの蔽無く、亦其の知るとするを害せず。況や此に由りて之を求めば、又知る可きの理有るをや。  
■「片言以て獄を折む可き者は其れ由なるか。子路諾を宿むること無し（顔淵篇）」。子路は片側だけから聴いただけで、正確に判決を下すことが出来た。また、一度承諾すれば、即座に実行した。「道行れず。桴に乘りて海に浮ばむ。我に從ふは、其れ由か。子路、これを聞きて喜ぶ。子の曰はく、由や勇を好むは我に過ぐ、材を取る所なからむ（公冶長篇）」。孔子が、桴に乗って海に浮かばん、と言ふと、即座に桴の調達にかかる。材料があれば早速作って、乗せられる破目となったであろう。子路は相手の言に正確に、即座に対応するため、結局、相手は、子路を騙せなくなる。子路篇では、衛の霊公の後継者を巡って、子路は出公（輒）が孔子の輔佐を求めていると、孔子の決断を迫るが、孔子は、「野（や）なるかな由や、君子は其の知らざる所に蓋闕如（がいけつじょ）たり」、わからないところは欠けたままにしておけと戒めている。子路はそこを踏み越へ、結局それが原因となり、命を落した。

○　子張祿を干（もと）めんことを學ぶ。子張、孔子弟子、姓顓孫、名師。干、求也。祿、仕者之奉也。子張、孔子の弟子、姓は顓孫（せんそん）、名は師。干は求なり。祿は仕る者の奉なり。  
■干gānは盾の形象で、まもることが原義。多様に用いられ、犯す、あずかる、ほす・・・ここは求めるとされる。gànは幹、胴体、主要、なす、有用な・・・gānには甘があり、甘いことであるが、満足する、楽しむ義がある。甘露gānlùも連想する。求であれば、祿を求むのみ。干であれば、守ると犯すの二義、預かると干されるの二義、つまり、どうすれば得られ、どうすれば得られないのニュアンスがあろう。■子張は孔子より48歳少（わか）い、しかし、なかなか度胸もある。踅xué（左右に気を配り行き来する）であるが思い切って、このぶしつけな問を、老師匠にぶつけた。というのは今風の解釈。問干祿なら祿を求むを問うであるが、学xué干祿、干祿を学ぶ、干祿とはどういうことですか。■詩、文王、旱麓に、「豈弟君子、干祿豈弟・・・豈弟君子、福祿攸降：*豈弟の君子は、祿を干むこと豈弟・・・豈弟の君子は、福祿の降りる攸（所）*」とある。豈弟とは楽しみ易んじること、豈弟の君子とは文王のこと。この祿とは天の祿。「文王は干祿の豈弟」と学んだが何のことかよく分からない、今風にはどういうことか、と子張が聞いたのかもしれない。  
　子の曰はく、多く聞き疑はしきを闕き、愼みて其の餘りを言へば、則ち尤（とがめ）寡し。多く見て殆きを闕き、愼みて其の餘りを行へば、則ち悔い寡し。言（こと）尤寡く、行（おこなひ）悔い寡ければ、祿其の中に在り。行寡之行、去聲。○呂氏曰、疑者、所未信。殆者、所未安。程子曰、尤、罪自外至者也。悔、理自内出者也。愚謂、多聞見者、學之博、闕疑殆者、擇之精、愼言行者、守之約。凡言在其中者、皆不求而自至之辭。言此以救子張之失而進之也。○程子曰、修天爵則人爵至。君子言行能謹、得祿之道也。子張學干祿、故告之以此、使定其心而不爲利祿動。若顏･閔則無此問矣。或疑、如此亦有不得祿者。孔子蓋曰、耕也餒在其中。惟理可爲者爲之而已矣。行xìng寡の行は去聲。○呂氏の曰く、疑は、未だ信ぜざる所。殆きは、未だ安からざる所。程子の曰く、尤は罪外より至る者、悔は理内より出づる者なり。愚謂へらく、聞見多き者は學ぶこと博、疑殆を闕く者は擇ぶこと精、言行を愼む者は守ること約。凡て其の中に在りと言ふは、皆求めずして自ら至るの辭なり。此を言ひて以て子張の失を救ひて、之を進むなり。○程子の曰く、天爵を修まば則ち人爵至る。君子の言行能く謹むは、祿を得るの道なり。子張祿を干むるを學ぶ、故に之に告ぐるに此を以てす。其の心を定めて利祿に動ざらしむ。顏･閔の若きは則ち此の問ひ無し。或ひとの疑ふ、此の如くして亦祿を得ざる者有ると。孔子蓋し曰（のたま）ふに、耕すや餒其の中に在り。惟理の爲す可きは、之を爲すのみ。  
■鄭玄は、「言行此の如くば、祿を得ざると雖も、亦同じく祿の道を得る」と注し、古注はこのように評した。北宋の学者達は論理的に解釈を施し、子張の失を孔子が正したとする。■干祿の豈弟　今風に言へば、言ふにはよく聞き疑ひなきことを言ふ、行ふにはよく見て殆きなきことを行ふ、言に尤が少なく、行に悔が少なく、それ故多くの人々の心が糾王から離れ、文王に向かひ、天が祿を文王に降ろした。祿は俸禄ばかりではあるまい。孟子は天爵（天の位）を得れば、人の世の爵を得ると表現した。程子は、孟子の言を入れたが、孔子は必ずしもそうとは限らない、耕したとて飢えることはある、しかし、得られようが得られまいがそうするべきこと、とした。■孔子は、人爵を得ること叶はなかったが、天の祿を受くることが出来る心のあり方、それを君子のあるべき姿として子張に説いたのではなかろうか。  
読書会：[2012年4月7日](http://www.kyoto.zaq.ne.jp/dkanp700/koten/rongodokushokai9.html#2012年4月7日)

○　哀公問ひて曰く、何をしてか則ち民服せん。孔子對へて曰はく、直きを擧げて諸（もろもろ）の枉（まが）れるを錯（お）けば、則ち民服す。枉れるを擧げて諸の直きを錯けば、則ち民服さず。哀公、魯君、名蔣。凡君問皆稱孔子對曰者、尊君也。錯、捨置也。諸、衆也。程子曰、擧錯得義、則人心服。○謝氏曰、好直而惡枉、天下之至情也。順之則服、逆之則去、必然之理也。然或無道以照之、則以直爲枉、以枉爲直者多矣。是以君子大居敬、而貴窮理也。哀公は魯君、名は蔣。凡そ君の問に皆孔子對へて曰くと稱するは、君を尊ぶなり。錯（そ）は捨て置くなり。諸は衆なり。程子の曰く、擧錯（きょそ）義を得れば、則ち人心服す。○謝氏の曰く、直きを好みて枉れるを惡むは、天下の至情なり。之に順へば則ち服し、之に逆へば則ち去る、必然の理なり。然れども、或は道を以て之を照らすこと無んば、則ち直きを以て枉れると爲し、枉れるを以て直きと爲す者多し。是（ここ）を以て君子敬に居るを大となし、理を窮むるを貴ぶ。   
■錯cuòは間違うことであるが、ここでは、砥石で研くこと、措cuòに通じ、置く、処置する、捨てる、やめる義となる。■枉wǎngは、まげる、ゆがめること。屈する（意志を曲げて余儀なくさせられる）、むざむざの義、又、すでにみた罔wǎngに通じる。歪んで育ち、教育もされてなく暗い。哀公がそうであったのかもしれない。哀公４年（BC491）、季桓子が亡くなり、季康子が立ち、孔子を呼び戻そうとしたが、公之魚が反対をして冉求が用いられ、その冉求が季康子に孔子を呼び戻させたのが哀公12年、それ以降の対話。季康子や冉求を用いているかぎり、民は服しますまい、その季康子が次に登場する。

○　季康子問ふ、民をして敬忠を以て勸ましむる、これを如何。子の曰はく、之に臨むに莊を以てすれば則ち敬す、孝慈なれば則ち忠なり。善を擧げて不能を敎ゆれば、則ち勸む。季康子、魯大夫季孫氏、名肥。莊、謂容貌端嚴也。臨民以莊、則民敬於己。孝於親、慈於衆、則民忠於己。善者擧之、而不能者敎之、則民有所勸、而樂於爲善。○張敬夫曰、此皆在我所當爲。非爲欲使民敬忠以勸而爲之也。然能如是、則其應蓋有不期然而然者矣。季康子は魯の大夫、季孫氏、名は肥。莊は、容貌端嚴なるを謂ふ。民に臨むに莊を以てすれば、則ち民己を敬す。親に孝、衆に慈あるは、則ち民己に忠。善者は之を擧げて、不能者は之を敎ゆれば、則ち民勸む所有りて、善をするを樂しむ。○張敬夫の曰く、此れ皆我に在りて當に為す所なり。民を敬忠して以て勸めしむを欲するが爲に之を為すに非ず。然れども能く是の如くなれば、則ち其の應、蓋し然るを期せずして然る者有り。  
■季康子は、魯の卿、季孫肥、康は諡であり、安樂撫民を康と曰ふ。この意味では、季康子は民によくしたとする評価を得ている。恐らく、季康子は民に敬忠を勤めしめているという自負が有り、孔子にどうだと自慢したのであろう。■孔子の返答からすれば、季康子が思ふ敬、忠には欠けるものがあった。民は季康子の政治を歓迎したようであり、民の利を図ったのであろう、しかし、その敬には荘、その忠には親への孝、民への慈が無く、不能を教化するといふことがないことを、孔子は不満とした。しかし、季康子は何を言われたのか分からず何の反応もなかったと思はれる。  
読書会：[2012年4月14日](http://www.kyoto.zaq.ne.jp/dkanp700/koten/rongodokushokai9.html#2012年4月14日)

○　或ひと孔子に謂ひて曰く、子奚ぞ政をせざる。子の曰はく、書に孝を云へりや。惟れ孝に、兄弟に友に、政有るに施すと。是れ亦政をするなり。奚（なん）ぞ其れ政をするとせん。定公初年、孔子不仕。故或人疑其不爲政也。書、周書、君陳篇。書云孝乎者、言書之言孝如此也。善兄弟曰友。書言君陳能孝於親、友於兄弟、又能推廣此心、以爲一家之政。孔子引之、言如此則是亦爲政矣。何必居位乃爲爲政乎。蓋孔子之不仕、有難以語或人者。故託此以告之。要之至理亦不外是。定公の初年、孔子仕へず。故に或人其の政をせざるを疑ふ。書は周書、君陳篇。書に孝を云へりやは、書に孝を言ふは此の如し。兄弟に善きを友と曰ふ。書に言ふ君陳能く親に孝に、兄弟に友あり。又能く此の心を推し廣め、以て一家の政を爲す。孔子之を引きて、言ふは、此の如くんば、則ち是れも亦政をなす。何ぞ必ずしも位に居りて乃ち政をするとせんや。蓋し孔子の仕へざるは、以て或人に語げ難き者有り。故に此に託し以て之を告ぐ。之を要するに至理に亦是に外ならず。  
■君陳に、「王若く曰く、君陳、惟れ爾（なんじ）令德孝恭なり。惟れ孝ならば、兄弟に友に、克く有政に施す。」とある。■朱熹は、定公の初年孔子が仕へなかったときのこととする。或る人が疑ふとは、陽貨の孔子に対する言葉「其の寶を懷きて其の邦を迷はす、仁と謂ふ可しや・・・事に從ふことを好みて亟（しばしば）時を失ふ、知と謂ふ可しや（陽貨篇）」をさすとみていよう。この時、孔子は陽貨に反論することができず、陽貨に仕へると返答した。告げ難きものとは、書経の君陳にあるごとく、親に孝、兄弟に友、これを政治に生かせば、敢えて位に就いて政治を行うまでもないとの考え方であるといふ。■子奚為政、政治に就こうと思えば就けるのに何故つかないのかというニュアンスから陽貨とするのであろうが、前後の関係からするに、或る人を陽貨とするよりは、晩年の孔子の頃の人とする方がしっくりくる。季康子は現実的政治力を発揮する冉求や子貢を用ゐ、孔子は一線から退いておられた。弟子が政治で活躍しているといふに、何故先生は政治から退いておられるのか。登用されれば行うが登用されても孔子の政に従ふまい。君陳のごとき政治スタイルは、当時踏襲するものがなかったと思はれる。しかし、孔子は、それを政治の原点とし、それが政治をするということではないかと投げかけずにはおれなかった。人として親に孝なく、兄弟に友無くんば、それ何を以てか政を為すや。  
読書会:[2012年4月19日](http://www.kyoto.zaq.ne.jp/dkanp700/koten/rongodokushokai9.html#2012年4月21日)  
  
○　子の曰はく、人として信無くんば、其の可なることを知らず。大車輗（げい）無く、小車軏（げつ）無くんば、其れ何を以てか行（やら）んや。輗、五兮反。軏、音月。○大車、謂平地任載之車。輗、轅端橫木、縛軛以駕牛者。小車、謂田車･兵車･乘車。軏、轅端上曲、鉤衡以駕馬者。車無此二者、則不可以行。人而無信、亦猶是也。輗níは五wǔ兮xīの反（音、声が合わない）。軏yuèは音月。○大車は、平地任載の車を謂ふ。輗は、轅（ながえ）の端に木を橫へ、軛（くびき）に縛りて以て牛を駕する者。小車は、田車･兵車･乘車を謂ふ。軏（よこがみ）は、轅の端、上り曲がり、衡（こう）を鉤（こう、ひっかける）して以て馬を駕する者。車に此の二つの者無くんば、則ち以て行く可からず。人にして信無くんば、亦猶是のごとし。

|  |  |
| --- | --- |
|  |  |

■包咸曰く、「大車は牛車。輗は轅の端の橫木、以て軛を縛る。小車は駟馬車（四頭だての馬車）。軏は轅の端上り曲りて衡を鉤す」。鄭玄は、「大車は平地載任の車」と注し、考工記に、「兵車、田車、乘車なるは、皆駟馬を駕す」とあり、小車とした。■輗軏があるために、自在に方向を変へることが出来る。これが無くば、行きたい所に行くことができない。信が無くば、やろうとしてもそこまで辿りつけない、となろうが、どうもピンとこない。ここでは、輗軏は轅と軛、あるいは衡（横木）を結びつけ、双方が機能する要、信は人と人を結びつけ事をなす要とするのであろうか。

○　子張問ふ、十世知る可しや。子の曰はく、殷は夏の禮に因り、損益する所知る可し。周は殷の禮に因る、損益する所知る可し。其れ或は周に繼ぐ者、百世と雖も知る可し。陸氏曰、也、一作乎。○王者易姓受命爲一世。子張問、自此以後、十世之事、可前知乎。馬氏曰、所因、謂三綱五常、所損益、謂文質三統。愚按、三綱、謂君爲臣綱、父爲子綱、夫爲妻綱。五常、謂仁義禮智信。文質、謂夏尙忠、商尙質、周尙文。三統、謂夏正建寅爲人統、商正建丑爲地統、周正建子爲天統。三綱五常、禮之大體、三代相繼、皆因之而不能變。其所損益、不過文章制度小過不及之閒。而其已然之迹、今皆可見、則自今以往、或有繼周而王者、雖百世之遠、所因所革、亦不過此。豈但十世而已乎。聖人所以知來者、蓋如此、非若後世讖緯術數之學也。○胡氏曰、子張之問、蓋欲知來、而聖人言其旣往者以明之也。夫自修身以至於爲天下、不可一日而無禮。天敍天秩、人所共由、禮之本也。商不能改乎夏、周不能改乎商。所謂天地之常經也。若乃制度文爲、或太過、則當損。或不足、則當益。益之損之、與時宜之、而所因者不壞、是古今之通義也。因往推來、雖百世之遠、不過如此而已矣。陸氏曰く、也は一に乎に作る。○王者姓を易へ、命を受くを一世と爲す。子張問ふ、此より以後、十世の事、前知す可しか。馬氏の曰く、因る所は三綱五常に謂ひ、損益する所は文質三統を謂ふ。愚按ずるに、三綱、君は臣の綱爲（た）り、父は子の綱爲り、夫は妻の綱爲るを謂ふ。五常は、仁義禮智信を謂ふ。文質、夏は忠を尙び、商は質を尙び、周は文を尙ぶを謂ふ。三統、夏の正は寅に建す人統爲り、商の正は丑に建す地統と爲し、周の正は子に建す天統と爲すを謂ふ。三綱五常は禮の大體、三代相繼いて、皆之に因りて變ずること能はず。其の損益する所、文章制度の小過不及の閒に過ぎず。而して其の已に然るの迹は、今皆見る可し。則ち今より以往、或は周に繼ぎて王たること有るは、百世の遠きと雖も、因る所革むる所、亦此に過ぎず。豈但十世のみならんや。聖人の來を知る所以の者は、蓋し此の如く、後世の讖緯（しんい；未来記）術數（法制をもって国を治めるやり方）の學の若きに非ず。○胡氏曰く、子張の問ひ、蓋し來を知ることを欲す。而して聖人は、其の旣に往く者を言ひて以て之を明らかにす。夫れ身を修むるより以て天下を爲（をさ）むるに至るまで、一日として禮無んばある可からず。天敍天秩は人の共に由る所、禮の本なり。商は夏に改むること能はず、周は商に改むること能はず。謂ふ所、天地の常經（永久不変の道）なり。若し乃ち制度文爲、或は太過なれば、則ち當に損すべし。或は足らざれば、則ち當に益すべし。之を益し之を損し、時と之を宜しくして、因る所の者壞れず。是れ古今の通義なり。往に因りて來を推すに、百世の遠きと雖も、此の如きなるに過ぎざるのみ。  
■陸氏（陸象山、1139―1192）により、十世可知也、の也は乎、疑問形、とする。■朱熹は一世を一王朝とみており、夏、殷は数百年、十世とは数千年、百世は数万年先となり非現実的である。■因と損益について、馬氏は因る禮を三綱五常、損益を文質三統とする。朱熹は、三綱を君臣、父子、夫妻関係、五常を仁義禮智信とし、これを不変なるものとする。文質を夏の忠、商(殷)の質、周の文、三統（暦のこと）を寅（十二支）を正（月）とする夏の人統（禹は今の正月）、丑を正とする商の地統（湯は十二月を正月）、子を正とする周の天統（武王は十一月を正月）とした（天は子に開け、地は丑に開け、人は寅に開く）。これは変化するものであるが、そのなかで、損益する所は文章制度上のマイナーな範囲とみた。■「書に天敍･天秩（天爵・天の秩序）を言う。天に是の理有り、聖人循って之を行う。所謂道なり。聖人は天に本づき、釋氏（釈尊）は心に本づく（二程全書）」■讖緯術數ではなく往（古）を知り、（未）来を知るのが聖人の道。以上が朱熹の釈であろう。■季氏篇に、「孔子の曰はく、天下道有れば則ち禮樂征伐は天子より出ず。天下道無ければ則ち禮樂征伐は諸侯より出ず。諸侯より出ずれば蓋（けだ）し十世にして失（う）せざること希（すく）なし。大夫より出ずれば五世にして失せざること希なし。陪臣が國命を執り三世にして失せざるは希なし。天下道有れば則ち政は大夫に在らず。天下道有れば則ち庶人議（ぎ）せず」とある。夏は17世約440年（BC2070～）、殷は30世約640年（BC1765～）、周はBC1121～とされるからBC491年の孔子の頃なら630年となる。「十世可知也」は諸侯の禮は十世続くのが稀なのですね、と子張が言ふ。孔子は天下に道が行はれるなら、その禮の基本は百世先であっても、夏、殷、周の禮を引き継ぐものとなるとされたのではないか。  
読書会：[2012年5月12日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai9.html#2012年5月12日)

○　子の曰はく、其の鬼に非ずして之を祭るは諂ひなり。義を見て為（せ）ざるは勇無きなり。非其鬼、謂非其所當祭之鬼。諂、求媚也。知而不爲、是無勇也。其の鬼に非ずは、其の當に祭るべき所の鬼に非ざるを謂ふ。諂ふは媚を求むるなり。 知りて為ざるは、是れ勇無きなり。  
■鄭玄は、「人神を鬼と曰ふ。其の祖考（祖先）に非ずしてこれを祭るは、是れ諂ひて福を求む」とした。■正義曰く、齊の田氏君を弑す若く、夫子之を討つを請ふ。是れ義、宜しき所を為すなり。而して魯君討つこと能はず。是れ勇無きなり。■これは次の八佾篇につながる。季氏が八佾や泰山で祭祀を行ふは、非其鬼而祭之、孔子は冉求にそれを止めよ戒めた。これは言ふは易く行ふは難い。時の流れ、その流れに乗る権力者の不義をみて、義を行ふは、諫言であり、よくて左遷、わるくすれば、投獄、絶命となった。晩年の孔子の言は無視、あるいは丁重に忌避された。隠者は、「已んなん已んなん、今の政に從ふ者は殆（あやう）し（微子篇）」と忠告した。  
読書会：[2012年5月19日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai9.html#2012年5月19日)